

ヨハン・マッテゾンにおける修辞学と「よい趣味」

—ギャラントと装飾との関わりから—

米良ゆき(九州大学大学院)

ヨハン・マッテゾン(1681-1764)は、当時流行していた「よい趣味」の概念を自身の音楽論に導入し、「ギャラント」概念に関連づけている。このギャラントという語は以後の音楽理論家たちによって、バロック時代への反発として生まれた一つの「様式」を指す語として定着していった。このような重要性にも拘らず、従来マッテゾンにおける「ギャラント」や「よい趣味」は単に理論的知識に対立するものとしてのみ捉えられており、その意義が十分に議論されているとは言い難い。そこで本発表は、装飾及びギャラントをめぐる記述を手がかりに、「よい趣味」と修辞学との関係性を明らかにし、18 世紀美学におけるマッテゾンの音楽観の実像を再考すると同時に、18 世紀ドイツ音楽論の一端を解明することを目的とする。

佐々木健一によれば「よい趣味」とは 17～18 世紀のフランスで流行した概念で、真に美しいもの、優れているものを見分ける能力を意味し、その射程は人事全般の良し悪しにも及ぶ。イギリスの論考を中心に導入された後、「趣味」は 18 世紀美学の中心的問題に発展していく。アディソンやバークらのイギリス哲学によれば、「趣味」の概念は自然主義的に理解される一方で、慣習によって育成されるというアポリアが存在することは、小田部胤久が指摘するところである。

ではマッテゾンにおける「よい趣味」とは何か。マッテゾンは装飾をギャラントの派生語である「ギャラントリ」と実質的に同一のものとし、「慣習」に担わせている。確かにこのことは、マッテゾンが修辞学の中でも装飾を「理論的知識」というより、むしろ実践的に体得するものとして捉えていたことを示しており、「趣味」が慣習によって育成されるとするアディソン、バークらとの共通項を見出すこともできるだろう。しかし、さらに注目すべきは、装飾ないしギャラントリの節度を問題にする際、マッテゾンがイソクラテスの修辞学における「よい思慮と健全な判断力」を「よい趣味と健全な判断力」と言い換えている点である。この「よい思慮」から「よい趣味」への改変には、彼が古代ギリシャ以来の修辞学と 18 世紀の流行概念である「よい趣味」をいかに結びつけようとしているかが端的に表れている。このことに加えて、「よい趣味」やギャラントは、アフェクトの喚起との関わりから自然や道徳との問題にも繋がりを持ち、単に実践的なものに留まらず、ある種の普遍性を獲得しうるものであると言えるだろう。

以上のように、マッテゾンは伝統的「学識」である修辞学に、流行に沿ったアクチュアルな働きを付与し、一方で流行概念であった「よい趣味」に音楽論の中での正統な基礎付けを与えようとしている。それによって彼は、伝統的思想を自身の時代に適合させるに留まらず、「趣味」という言葉に内包されたアポリアを引き受けつつ理論と実践、古代と現代とを統合させていったのである。